



TITLE:

図書館と本と補修

AUTHOR(S):

木田, 章義

---

CITATION:

木田, 章義. 図書館と本と補修. 静脩 2007, 44(2): 1-4

ISSUE DATE:

2007-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/49189>

RIGHT:



# 静脩

2007年11月

The Kyoto University Library Network Bulletin

Vol. 44. No. 2

## 図書館と本と補修

京都大学文学研究科教授 木田 章義

### 図書館の役割

図書館の機能の中で、インターネットを利用した各種の情報の収集、発信基地としての役割が注目されている。この情報収集の面では、図書館は大学の中でもっとも重要な位置を占めるようになることは明らかで、大学の研究水準の高下も左右するようになってくるであろう。これからは、図書館予算はもっと潤沢でなければならぬし、さまざまな試みが行い得る人員の配置が必要である（大学図書館の人員を減らすというのは、長い目でみれば決して良策ではない）。

図書館の機能としては、実は、もう一つの役割があることが忘れられかけている。それはこれまで国立大学の図書館が果たしてきた、「文化財のダム」としての役割である。古くはこのダムの役割は、公家、寺院、大名家などが担っていたが、明治維新の頃の廃仏毀釈、公家や大名家の身分廃止（華族制度の制定）、敗戦後の混乱と華族制度の廃止などで、これらの文化を担ってきた層が崩壊してしまった。そのために、そこに「溜められていた」貴重な典籍・文書類が、捨てられたり、紛失したり、巷間に流れたりした。

京都大学の附属図書館には、京都の公家方から寄贈されたり、寄託された書籍が少なくない。公家や寺院の蔵書を一時預かっていたこともある。



明治維新の後、公家は一部は公爵や男爵などの華族として生きながらえたが、東京在住を強要された結果、あるいは完全に東京に住居を移し、あるいは京都と東京の二重生活になった。京都に蔵されていた典籍・文書類は、自家の貴重な来歴を語り、自家の家職を継いでゆくために必要なものであったが、新しい社会では歴史的な意味しかない。古い時代ならば、そういう資料は反故となったり、関係する家々に分けられたりして、散逸してしまうのであるが、明治以降は、国立大学があり、そこには研究者が居たので、その価値を認め、保存してくれる場所として、半永久的に保存してもらうことを期待

して、寄贈・寄託したのである。国立大学は、国家がその存在を保証していたから、国が亡ばない限り、自家の文化的貢献を示す典籍・文書類が、後の世にもずっと伝えることができると判断したのである。

附属図書館の谷村文庫や河合文庫、各部局図書室に寄贈された個人収集の書籍なども、散逸を防ぐために、また、後学の研究のために、図書館に寄贈された。持ち主の文化に対する愛着と保存への義務感が感じられる。もちろん国立大学であるという信頼感が強かったからである。

特に、京都大学は京都に位置しており、二番目の国立大学であり、優秀な学者が居るという好条件に恵まれ、信頼も厚かったため、このような文化財が集まった。過去の文化を守り、後代に伝えてゆく役割を引き継いだのである。この役割は、あわただしい時期には目立たず、予算の配分も忘れられてしまいがちである。

寄贈は受けただけでも、整理する人員が無くて、目録だけしかできていないものや、一部が未整理のものも残っている。現在は文学研究科の大学院生の研究を兼ねた奉仕活動として、細々と整理作業が続けられている。このような整理作業についても人員の配置が望ましい。

また、図書館の予算が確保されている時期には、貴重な典籍が市場に出れば、それを購入してきた。個人の蔵書となると、税金逃れや利殖にも利用され、我々の目からは見えなくなってしまうことも少なくない。京都大学に所蔵されれば、それはほぼ半永久的に保存され、利用され、その価値を遺憾なく発揮することができるのである。

さまざまな経路で所蔵されることになった典籍・文書は、蔵の中で長い間置かれていたために虫損が激しかったり、爛脱があったりする。書庫に入れる前には燻蒸したり、虫干しをしているので、書庫に入ったあとは虫害はほとんど発生せず、特に貴重書庫では、湿度・温度の管理によって、虫害は進まない。しかし、入る前

にあった虫損や爛脱などが補修されずに保存されているものもあり、このような典籍は、利用されないまま、あるいは知られないまま書庫に眠っている。

このような虫損・爛脱の書籍を利用できる形にするために、「補修」「修復」という作業が必要となる。

#### 補修の方法

本の補修作業は、古くから行われており、現存資料でも裏打ちや繕いをしてある本が少なくない。特に、中国の版本のように竹紙に摺られているような本は、もろくなってしまっており、裏打ちなど、何らかの補修を受けていることが多い。表紙の取り替えはごく普通に行われている。ただ、技術の無い装幀師の手によって不適切な補修が行われていることがある。たとえば補修に使った紙や糸が強すぎて本体を傷めている場合、帙が本の大きさに合っていないために本を傷めている場合など、補修が逆効果になっていたりする。補修の方法は、時代と共に違ってくるし、50年後の結果まで見届けられる人は稀なので、補修方法の良否の判断は難しい。50年前には最良の補修方法とされていたやり方で補修されたものでも、それによって本紙が傷み、もう一度補修することができない状況になってしまっているものもある。特に、糊は重要な要素である。小麦粉を煮てから、何年か寝かせたものは、虫にも食われず、紙にもやさしく、後に補修をやり直すときにも、水できれいにはがれる。糊がはがせれば、再度の補修が可能になる。

最近の考え方は、本に負担がかからないように、また、出来る限りもとの形を残すようにするのが良いとされている。

方法としては、裏打ち、繕い、漉きはめ、漉き繕いなどがある。

「裏打ち」は古くからもっとも普通に行われてきた方法である。出来る限り薄い紙を、傷

んだ紙の裏側全面に貼り付けて補強するやり方である。冊子本の場合には少々厚い紙で裏打ちしても問題は少ないが、卷子本や軸の場合には、何度も開き、巻くうちに巻き皺ができ、裏打紙が厚い場合、その皺によって本紙が傷つくことがある。ひどい場合には、その皺のところで切れてしまう。一般的には典具状と呼ばれるような極く薄い紙を用いる。

本紙を大きなまな板のような板に裏向きに置き、水を打ち、裏打紙にも水を含ませる。本紙に糊を付けるやり方と裏打紙に糊を付けるやり方がある。二枚の紙がしっかりと接着していることが重要で、一部がはがれると本紙面が浮いたり、ひきつったりする。あとは乾燥板に貼り付けて、生乾きの時に重しを乗せて平にする。

このやり方では、本紙が一度水浸しになり、糊が付き、裏の紙と一体となるので、もとの紙の風合いが分かりにくくなってしまう（紙の風合いを残すのは、紙による時代判定など、紙からの情報を残すという点で重要な意味がある）。

「繕い」というのは、虫食いがあれば、その形よりも若干大きめに和紙を切り抜き、周囲を小刀やメスのようなもので毛羽立たせ、虫食いの穴を塞ぐように貼り付けてゆくやり方である。ちょうど、破れた服に継ぎを当てるようなものである。布の継ぎ当ては糸でかかるが、和紙の場合には、虫穴の縁の繊維と継当紙の縁の繊維とを絡ませて、薄い糊で接着する。この方法は、紙を水に浸さないのので、紙の風合いを残すことができるが、穴の数だけ継当紙を切り抜き、一つ一つの穴に貼り付けてゆくの、たいへん時間がかかり、当然、高価なものとなる。このやり方で補修できるのは、重要文化財級の資料である。

「漉きはめ」というのは、最近、編み出された方法である。修理すべき紙を、紙漉の簀に載せ、紙を漉くのと同じように紙漉槽に入れて漉くのである。素早く紙の上の液を流すと、虫穴の部分だけに、紙の繊維が残り、虫穴などがふさがる。朱やスタンプなどはあらかじめ膠や

薬品などで固定しておく。この方法は、袋綴じのように、紙の片面にだけ文字がある場合にはかなり効率のよい補修法であるが、表裏に文字がある場合には、虫穴の裏側に繊維が残って、文字を隠してしまう場合があり、注意を要する。漉く作業を機械で行うことが可能になり、この方法が現在もっとも安価な補修法となっている。

「漉き繕い」は、紙漉槽を使わず、一枚ずつを補修台に乗せ、虫穴の部分だけに紙の繊維を流して、穴をふさぐ方法である。この場合も朱やスタンプは膠などで固定しておく。

紙そのものだけではなく、糸が切れてしまった本、糊がはがれてバラバラになった本なども補修する必要がある。綴葉装(数枚を重ねて折って、折目の処を糸でかかる。それを数冊ずつ更に糸でつなげて一冊の本にする ノートには現在もこの装幀を使っているものがある) 粘葉装(一枚の紙を二つに折り、一枚ずつ重ねて糊でつないでゆくやり方)などは、バラバラになると、順番が狂っていることが多く、もとの順序に戻してから装丁しなければならない。綴り直すときに順番が狂ってしまうこともあるので、補修後の確認を怠ってはならない。

補修が終わった典籍・文書は、安定した保存が可能となるだけでなく、閲覧もできるようになり、本来の役目を果たすことができる。貴重な典籍・文書は、保存とともに、できる限り利用も考えておかなければならないのである。

補修は、多額の費用がかかるのに、目に見える効果が少ないため、これまであまり注意されてこなかった。しかし、この目立たない責務を着実に果たしてゆくことによって、日本の文化を保存してきた家々や個人の努力を、継続してゆくことができる。本学では、年に数冊から十数冊ずつの補修を行っているが、このような牛の歩みが継続されていることにも、もっと注目し、評価すべきである。

文化財を保存し、補修し、利用に供するという努力は、数年で結果が出るのではなく、50年、100年後にようやく気づかれるという性質のものである。それも「きれいに残っている！」という感嘆だけで終わることもある。正倉院の御物のすばらしさを讃える人は多いが、それらの

御物を現代まで守ってきた責任感と努力に思いを馳せる人は稀である。本学の図書館に蔵されているものは、一部を除いて、御物と比べることができるものは無いが、千年のちには、同じように鑑賞できるものになっているであろう。

(きだ あきよし)



「漉き繕い」の方法で補修された『前定男命易数』 左：修理前、右：修理後

## 平成19年度 公開企画展

### 古典籍がよみがえる - 京都大学貴重資料修復記念展 -

長い歴史をもつ京都大学には、たくさんの貴重な古典籍が所蔵されています。私たちは、これらを研究対象として利用しながら、文化遺産として大切に保存してきました。それでも、長期間の保存や利用による劣化は徐々に進行し続けるため、京都大学では、計画的に貴重資料の補修事業を実施してきました。このたびの修復事業により、附属図書館、文学研究科、総合博物館が所蔵する多くの貴重な古典籍をよみがえらせることができました。これを記念して、修復事業の成果を学内関係者および一般市民に広く公開するとともに、古典籍を後世に伝えるために必要な補修・保全の方法を紹介することを目的として、京都大学貴重資料修復記念展を開催します。

主 催：京都大学図書館機構

開催期間：12月4日(火)～12月24日(月)

開催場所：京都大学時計台記念館1階企画展示室

展示内容：修復資料「漢書抄」(重要文化財)外7点(附属図書館蔵)

「琉球資料」(文学部蔵)、「広輿考」(総合博物館蔵)

修復の実際(作業工程等のパネル展示)